

大村西崖著『密教発達志』訳注研究（四）

元 山 公 寿

本研究は、大村西崖（1868～1927）によって著された『密教発達志』を書き下して、現代の研究成果を参考にしながら、詳細な脚注を加えることを目的としている。本論文は、昨年までに発表したものの続編で、第一章の「教の興りより隋に至るまで」の第二十五節「仏図澄の呪術」（底本の五十八頁）より、第三十五節「仏陀跋陀羅の訳経」の第九項「夜摩天」（底本の七十三頁）までである。

以下に、訳注に当たった凡例を記す。

凡例

- 一、大村西崖著『密教発達志』（国書刊行会、1972覆刻）を底本とした。
- 二、旧漢字は、当用漢字に改めた。
- 三、書き下すに当たって、可能な限り、大村の返り点にしたがい、適宜、段落分けをした。
- 四、大村による割り注は○で示した。
- 五、経典名や著作名には『』を、引用文には「」を附した。

六、人名には、可能な限り $\Rightarrow$ によつて生没年、国王の場合は在位を補い、インド名が附されていない場合には、そのインド名を補った。

七、地名に關しても、可能な限り $\Rightarrow$ によつてインド名、及び現在の地名を補った。

八、年号に關しても、 $\Rightarrow$ によつて西暦年を補った。

密教發達志卷一

日本 大村西崖撰

一、教の興りより隋に至るまで

二十五、仏図澄の呪術

然るに當時、呪術を能くする者、すでにその人あり。 $\Rightarrow$ 仏図澄 (348)、西域の人にして、本姓、帛氏なり。少くして出家し、再び罽賓 (Kashmira、現在の Kashmir) に到る。永嘉四年 (310)、洛陽に来る。善く神呪を誦し、鬼物を役使し、麻油、燕脂と雜え、以て掌に塗る。千里の外事、皆、掌中に徹見すること、面を対すが如し。また能く潔斎者をして、これを見せしむ。また鈴の音を聴きて、以て事を言う。備に効驗せざるなし。

嘗て後趙 (319 ~ 351) の石勒 (319 ~ 333) を詣し、応器 (patra) に水を盛り、香を焼き、これを呪して、須臾に青蓮花を生ず。これに由りて、勒の信服する所となる。あるいは龍を呪して、襄城の湮水の竭を満ち、あるいは楊杖を取りて、これを呪し、以て石季龍 (石虎、334 ~ 349) の子の斌 (349) の死を起こす。また善く未然を察し、一として中らざるなし。建武十四年 (348) (東晋の永和四年) 十二月八日、鄴宮に卒す。春秋、一百十七なり。

平生、氣を服して自養し、あるいは累日、食さず。腹旁に一孔あり、常に絮を以て、これを塞ぐ。夜、書を読まんと欲さば、すなわち絮を抜き、孔中に光を出す。齋時、平旦に流水に至り、孔中より臟腑を出して、これを漉う (『法苑珠林』六十一、『高僧伝』九、『晋書』九十五⁴)。

二十六、訶羅竭の呪術

訶羅竭（288）、樊陽（現在の河南省済源）の人なり。少くして出家し、太康九年（288）、洛陽に至る。時に疫疾の流行、甚だし。竭、為に呪して、これを救治し、十に八九を瘥す。元康元年（291）、西し、止婁に入る。石室に禪座し、八年に至りて化す。弟子、これを闡維するも、灰燼せず。後に西域の人の竺定なる者あり。東晋の咸和（326～334）中に、往きて、その屍を視るに、嘗然として平坐す。已に三十余年なりと云う（『高僧伝』十）。

二十七、耆域の呪術

耆域は、天竺の人なり。華戎を周流し、常所あることなし。天竺を發ち、扶南（bham、現在のカンボジア南部）に至り、諸の海濱を経て、交わること広きに及び、並びに靈異あり。惠帝（290～306）の末に、洛陽に達す。時に衡陽（現在の湖南省衡陽）の太守滕永文、洛にありて病を得、年を経とも差えず。両脚、彎屈して、起行すること能わず。域、すなわち楊柳を以て、淨水を拂い、永文に向いて呪す。手を以て、永文の兩脚を搦りて、起たしむ。すなわち行歩すること、故の如し。また枯樹を呪して、回生せしむ。また一人あり。癰を病みて、まさに死せんとす。域、応器を以て、病者の腹上に著け、白布を以て、これを通覆し、呪願すること数千言、すなわち臭氣、一屋を徹するあり。病者の曰く、「我れ活く」と。域、人をして布を挙げしむ。応器の中に、淤泥の若き者、数升あり。臭いて、近づくべからず。病者、遂に差ゆ。域、後に西域に還り、終る所を知らず（『法苑珠林』六十一・『高僧伝』九）。

二十八、天竺の人の幻術

永嘉（307～313）中に天竺国の人にして、江南に至る者あり。数術を善くし、能く舌を截ち、断を続け、火を吐き、変化す。此の如き幻術、作す者、一にあらず、天下、方に乱ると云う（『法苑珠林』七十一）。

二十九、難陀、呪明を結集す

龍樹の弟子にして、能く呪明を伝うる者、難陀 (Nanda) とす。その出世、まさに両晋の交 (316 - 317) にあるべし。『西域求法高僧伝』(巻下) に云く、「時に彼(龍樹)の弟子、その号、難陀なり。聡明博識にして、意をその典に漬く(持明呪蔵)。西印度にありて、十二年を経て、専心に呪を持し、遂に便ち感応す。食時に至ることに、食、空より下る。また呪を誦して、如意瓶を求むるに、久しからずして、便ち獲。すなわち瓶中に於て、経を得て、歡喜す。呪を以て、結せざれば、その瓶、遂に去る。是に於て、難陀法師、呪明の散失すを恐れ、遂に便ち十二千頌ばかりを撮集し、一家の言と成る。一頌の内におけることに、呪印の文を離合す。また言同、字同といえども、実には、すなわち義別、用別なり。口相伝授にあらざるよりして、実に解悟するに、因なし。後に陳那 (Dignāga, ca. 480 - 540) 論師(蕭梁 {502 - 557} の代に当たる)、その製作を見るに、功、人智を殊にし、思、精端を極む。経を撫で、歎じて曰く、嚮にこの賢をして、意を因明 (hetuvidyā) に致さしむれば、我れ、また何の顔か、あらんや」と。これ、唐の道琳 (7c)、那爛陀寺 (Nalanda) にありて、義浄 (635 - 713) の為に論述する所なり。道琳、深く呪明に通じ、その言、洵に信すべきとす。呪明蔵の結集、すなわち実に、難陀を以て濫觴とすること、可なり。初めに一万二千頌あり。蓋し後世に、次第に増備する者なり。恨むらくは、今、また難陀の原集を知る由なし。

三十、東晋の尸梨蜜多羅、始めて呪経を訳し、また呪法を伝う

東晋 {317 - 420} の尸尸梨蜜多羅 (Sīmitra, - 317) (吉友)、西域国王の子なり。永嘉中 {307 - 313} の始めに到り、元帝 {317 - 322} の時、『大孔雀王神呪経』・『孔雀王雜神呪経』(各一卷)を訳し、咸康中 {335 - 342} に卒す。年、八十余なり。善く呪術を持し、向う所、皆、驗す。盛り建康(現在の南京)に行き、時の人、呼びて高座法師とす。

①孔雀呪法

初め、江東（現在の江蘇省南部、浙江省北部）に未だ呪法あらず。蜜多羅、すなわち、孔雀王神呪を伝う（『出三藏記集』⁽¹⁰⁾十三・『歴代三寶記』七・『高僧伝』一・『開元錄』三・『貞元錄』五⁽¹⁴⁾）。

②結果

『孔雀王經』二部、今、共に存せず。但しその結果呪法、載ち蕭梁の僧伽婆羅（Saṅghapāla, ca.460 - 524）訳の『孔雀王呪經』⁽¹⁵⁾の末⁽¹⁶⁾にあり。結果の名、元・律部に出づ。僧衆の所住の界を限るを以て、義とす。然るに密教の謂う所の結果、すなわちこれと異なる。その意、主に呪場の辟邪にあり。蓋し、また婆羅門教に由りて来る。

但し『善見律毘婆沙』⁽¹⁷⁾（卷十七）に説く所の五種の結果（方、円、鼓形、半月、三角）の如き、密教の壇形と、その本を同じうする者なきにあらず。

③三重の円壇

『孔雀經』の結果、すなわち円壇を用う。三重の規界を作り、香爐・燈・幡・鏡・刀を配備す。

④牛尿、地に泥み、芥子、火に焼る

また「牛尿を地に泥み、芥子を火に焼る」⁽¹⁸⁾と説く。前出の『摩登伽經』⁽¹⁹⁾の施陀羅母の行ずる所の外道の護摩法、ここに至りて、現然として仏教の中に入る。

⑤呪術なりや、邪術なりや

『仏祖歷代通載』⁽²⁰⁾（卷十六）に曰く、「東晋の尸梨蜜より已降、秘呪を宣訳す。要するに、その大婦、鬼神を祀り、

邪妄を驅り、人の為に災を禳い、患を积くに過ぎざるのみ。その間、往往に、名を比丘に仮り、外国より来たり、術を挟み、愚を驚かすことなきにあらず。いわゆる羅漢法者あり。正に、么麼邪術にして、下劣の技なり。また、猶お道家の雷公法の如きの類なり」と。蓋し、真に然り。

④呪經の初作

密法の震旦に伝うること、実に蜜多羅を以て、初祖とす。想うに、印度の呪經の述作、蓋し、また晋代に昉まるのみ。

三十一、失詛の古呪經

然るに、後漢の失詛と称する者に、『安宅神呪經』・『安宅陀羅尼呪經』(『七仏安宅神呪經』、これと同本か)・『辟除賊害呪經』(『呪賊呪法經』、これと同本か)・『觀世音所說行法經』(呪經)・『五龍呪毒經』・『取血氣神呪經』(各一卷、『開元錄』一・『貞元錄』一)あり。梁の僧祐(445-518)、その年代を記さず(『出三藏記集』四)⁽²⁴⁾。隋の費長房(597-)、すなわち權に「後漢の錄」に附し、詮定し難き者とす(『歷代三寶記』四)⁽³⁰⁾。

①四神

按ずるに、『安宅神呪經』に、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神の名あり⁽³¹⁾。これ、印度の談ぜざる所なり。それ、支那の撰述と爲すこと、知るべきなり。今、姑く、ここに附す。

『賊害呪經』に一呪あり。その礼仏作法に云く、「仏前に於て、七灯を然し、膠香を焼き、華を散じて、この呪を説くこと七遍なり」と⁽³²⁾。

『安宅陀羅尼經』、古きに致して、見るべきなし。

『觀音行法經』以下の三部、並びに佚して存せず。

この諸經、蓋し、皆、蜜多羅以後の出なり。

三十二、曇無蘭の訳經

曇無蘭(Dharmaraksā?, ~381) (法正)、西域の人なり。太元六年(381)より二十年に至るまで、揚都(現在の南京)にありて、經を訳す。『陀隣尼鉢經』⁽³³⁾・『玄師毘陀所說神呪經』⁽³⁴⁾・『檀特羅麻油述經』⁽³⁵⁾・『摩尼羅賣經』⁽³⁶⁾・『呪時氣病經』⁽³⁷⁾・『呪齒經』⁽³⁸⁾・『呪目經』⁽³⁹⁾・『呪小兒經』⁽⁴⁰⁾・『孔雀王呪經』⁽⁴¹⁾・『七仏所結麻油述經』⁽⁴²⁾・『大神母結誓呪經』⁽⁴³⁾・『伊洹法願神呪經』⁽⁴⁴⁾・『解日厄神呪經』⁽⁴⁵⁾・『六神名神呪經』⁽⁴⁶⁾・『麻油述呪經』⁽⁴⁷⁾・『摩尼羅賣神呪按摩經』⁽⁴⁸⁾・『医王惟樓延神呪經』⁽⁴⁹⁾・『龍王呪水浴經』⁽⁵⁰⁾・『十八龍王神呪經』⁽⁵¹⁾・『請雨呪經』⁽⁵²⁾・『止雨呪經』⁽⁵³⁾・『嗽水經』⁽⁵⁴⁾・『幻師阿夷鄒神呪經』⁽⁵⁵⁾・『呪水經』⁽⁵⁶⁾・『藥呪經』⁽⁵⁷⁾・『呪毒經』⁽⁵⁸⁾・『呪牙痛經』⁽⁵⁹⁾・『呪眼痛經』⁽⁶⁰⁾(各一卷、『開元錄』三、『貞元錄』五、『歷代三寶記』七、更に『持句神呪經』を加う)あり。

この中の『陀隣尼鉢經』、すなわち『持句神呪經』と同本異訳なり。

『玄師毘陀經』に、除害の呪一首あり。⁽⁴⁵⁾

『檀特羅麻油述經』に、また神名の呪一首あり。これを誦さば、すなわち能く鬼神の諸難を辟くと説く。⁽⁴⁶⁾

『摩尼羅賣經』は、呪を持する種々の機能を説く。⁽⁴⁷⁾

① 結縷

『呪時氣病經』に一呪ありて、結縷繫頭を説く。⁽⁴⁸⁾ 結縷は、すなわち後代の密教の金剛線の濫觴と為る者にして、始めてこの經に出づ。

② 神線

蓋し、婆羅門の神線(sutra, yajñopavīta)と、その本を同じうす。

『呪齒』・『呪目』・『呪小兒』の三經に、おのおの一呪あり。
『孔雀王呪』以下の二十經、すなわち佚して伝えず。

三十三、僧伽提婆の訳經

瞿曇 (Gautama) 僧伽提婆 (Saṅghadeva, ~ 391 ~) (衆天)、罽賓の人なり。学、三藏に通じ、誦持する所多し。苻秦 {351 ~ 394} の建元中 {365 ~ 385} に、長安に來り、孝武 {372 ~ 396} の太元十六年 {391}、江左 (現在の江蘇・浙江省周辺) に至る。慧遠 {334 ~ 416} の迎うる所となりて、廬山に入る。隆安二年 {397}、建康に遊び、行間に經を訳す。後に終る所を知らず。

その訳出する所に、『龍王結願五龍神呪』・『大將軍神呪』の二經あり (『開元錄』⁽⁴⁹⁾三、『貞元錄』⁽⁵⁰⁾五。『歷代三寶記』七は曇無蘭訳とす⁽⁵¹⁾。共に佚して今に伝えず。

三十四、杯度の呪術

杯度 (~ 426) は、俗姓の名字を詳らかにせず。初め、冀州 (現在の河北、山西の二省と河南省北部) にありて、後に建康に遊ぶ。常に木杯に乗りて、水を度る。これに因りて、名を得。行蹟に神異多く、呪を以て、能く病を治す。宋 {420 ~ 479} の元嘉三年 {426} 九月、赤山湖 (現在の江蘇省包容市近郊) に至り、痢を患いて死す。 (『高僧伝』⁽⁵²⁾十・『法苑珠林』⁽⁵³⁾六十)

三十五、仏陀跋陀羅の訳經

仏陀跋陀羅 (Buddhabhadra, 359 ~ 429) (覺賢)、本姓、釈子なり。中印度の迦維羅衛国 (Kapilavastu) の人にして、甘露飯王 (Amritodana) の苗裔なり。祖父の達磨提婆 (Dharmadeva)、嘗て北天竺に商旅し、因りて居す。少くし

て孤螢なり。從祖、その聡敏なるを聞きて、迎え還し、度して、沙弥とす。受具の後、罽賓に遊び、止住すること積載、常に遊方弘化を志すことあり。秦の僧智嚴（一428）、罽賓に至り、跋陀羅の道名を聞きて、その東遊を促すに会う。是に於て、糧を裹み、葱嶺（Panir）を渡る。跋涉すること三年、路、六国を経て、南、交阯（現在のハノイ周辺）に至る。舶を駕し、海を循りて行き、遂に青州東萊郡（現在の山東省）に達す。羅什（Kumārajīva, 344 - 413）の長安にあるを聞き、すなわち往きて、これに従う。後に南征し、隆安二年（398）より宋（420 - 479）の永初二年（421）に訖るまで、揚都、及び廬山に於て、經を訳す。元嘉六年（429）、泥洹（nirvāṇa）す。春秋、七十有一なり（『出三藏記集』十四、『高僧伝』二、『歷代三寶記』七、『開元録』三、『貞元録』五）。

訳す所に、『出生無量門持經』（一卷）あり。前出の『無量門經』と同本異訳なり。しかも、その缺する所の八字呢を補い、また、その字義を説く。⁽⁶¹⁾

① 四方四仏

『觀仏三昧海經』（十卷、方等）もまた、跋陀羅の訳す所なり。四方四仏の説、始めて、この經に出づ。曰く、東方妙喜国の阿閼仏、南方歡喜国の宝相仏、西方極樂国の無量寿仏、北方蓮華莊嚴国の微妙声仏（卷九）、これなり。後の胎金兩部の四仏、これと、あるいは合し、あるいは合さずといえども、その権輿、すなわち実に、ここにあり。

② 觀仏法

また、觀仏像法を説く（卷九・十）。その法は、「まず、仏塔に入り、好香泥及び諸の瓦土を以て、地に塗りて、淨めしむ。その力能に隨いて、焼香散華して、仏像を供養す」⁽⁶²⁾。後に結跏趺坐し、一像・二像・三像、乃至、十像を觀想し已て、一室内・一僧坊・一頃地、乃至、一世界、中に滿つる仏像、間に空欠なしと想い竟りて、一切時中に恒に仏像を見るに至る。⁽⁶³⁾ また、化仏菩薩の身相・身色・光明・華台・幡蓋・持物等を説く。⁽⁶⁶⁾ 諸の『般舟三昧經』⁽⁶⁷⁾の所説に較ぶるに、

観想の法、益す精きを見る。

③三昧の諸名、密教に類する者

また、経の中に説く所の種々の三昧の名目、陀羅尼印相・法界性・滅諸魔相・大空智・遍一切処色身・菩薩摩訶薩金剛相・金剛頂等の如し。⁽⁶⁸⁾ 頗る密教の唱道する所と相類す。

④金剛神、曠野鬼を降伏す

また(巻六)、密迹金剛神、金剛杵・大利劍を揮て、以て曠野鬼を降伏するを説く。⁽⁶⁹⁾ これ、すなわち密教の降三世明王の三昧、及び金剛手菩薩の自在天を降伏すの話説と、相似す。

跋陀羅の訳す所に、また、『大方広仏華嚴經』⁽⁷⁰⁾ あり(六十卷、元熙二年〔420〕六月十日出⁽⁷¹⁾)。その梵本、昔道人支法領⁽⁷²⁾ 〔392〕、于闐より、これを得と称す(『出三藏記集』九)。⁽⁷³⁾ その述作年代、蓋し、西晋〔265～316〕の時にあるか。後に、唐代〔618～907〕に至りて、実叉難陀〔Śikṣānanda, 652～710〕、更に『八十卷經』⁽⁷⁴⁾ を訳す。すなわち増訂本なり。二經、大抵、相似す。

⑤華嚴の教主、及び説処

ただ、旧訳の教主、盧舎那なり。新訳、これを毘盧舎那と謂う。毘の義、すなわち遍なり。盧舎那の義、すなわち照なり。これを連ねて、以て、その身格を向上するのみ。あるいは釈尊を以て応身とし、盧舎那を報身とし、毘盧舎那を法身とす。あるいは毘盧舎那を自性身とし、釈尊を變化身とす。固より皆、釈尊の身格の異称に過ぎず。これを要するに、法身にして法を説くこと、この経を以て宗とす。それ、これを説くこと、七処九会に於てす。すなわち人間の三処五会(菩提場一会、普光明殿三会、逝多林一会)、天上の四処四会(須弥山頂忉利天〔trāyastriṃśat〕、夜摩天宮〔yama〕、

兜卒天宮 (tusita) 、他化自在天宮 (paranirmitaśavartina) 、各一会、これなり。

⑥三界の諸天

そもそも仏教に談ずる所の三界諸天に、二十八あり。曰く、欲界に六あり。すなわち四天王 (caturmahārājikāyika) ・忉利・夜摩・兜卒・化樂 (nirṃaṇarāṭaya) ・他化自在天なり。曰く、色界に十八あり。すなわち初禪に三あり、梵衆 (brahmacāyika) ・梵輔 (brahmapurohita) ・大梵天 (mahābrahman) なり。二禪に三あり、少光 (paritābha) ・無量光 (apramāṇābha) ・光音天 (abhāsvara) なり。三禪にまた三あり、少淨 (paritāśāṇṣṛṇṇisubha) ・無量淨 (apramāṇasubha) ・遍淨天 (subhaktisna) なり。四禪に九あり、無雲 (anabhraka) ・福生 (puṇyaprasava) ・無想 (asaṃhṛīka) ・広果 (bṛhaphala) ・無煩 (abrha) ・無熱 (atapa) ・善見 (sudarśana) ・善現 (sudṛśa) ・色究竟天 (akaniṣṭha) なり。曰く、無色界に四あり。すなわち空無辺処 (ākāśanantyāyatana) ・識無辺処 (vijñānāntyāyatana) ・無所有処 (ākīncanyāyatana) ・非想非非想処天 (naivasamjñānāśaṃjñātana) 、これなり。

四天王天、須弥山の半ばにあり。忉利天、その山頂にあり。爾余の諸天、層層としてその上に位す。皆、雲に憑りて住す。但し、四禪以上、方にこれ空居なり。身長・寿量・衣重・光明・飲食等の諸福報、おのおの差あり。人、その修むる所の善業に因り、ここに生ずることを得。故に通じて、これを生天と謂う。欲界の頂に、魔王宮あり。色界の頂に、摩醯首羅天王宮あり。無雲・福生・広果の三天、凡夫、善を修めて生ずることを得。無想天、すなわち外道の居す所なり。無煩以上の五天、淨居と云い、また不還と云い、三果聖人の居す所なり。また須弥山の半ばに当たり、虛空中に日月星宿天あり。四天王の居す所の下に、山根上を升ること一萬由旬に至る間、下に向かいて放逸・持鬘・堅手(常醉、華鬘、器手)の三天あり(『長阿含』・『起世因本』・『三界差別』等の經、『俱舍』・『阿毘曇』・『毘婆沙』等の論)。但し、華嚴經の説会の列衆の中、色界に、ただ光音・遍淨・広果・大自在天の四天のみありて、余の諸天なし。蓋し後代に漸く分化して十八天と爲るのみ。

⑦ 四天王

四天王とは、毘沙門 (Vaisravaṇa)・持国 (Dhṛtarāṣṭra)・增長 (Virūdhaka)・広目 (Virūpākṣa) の四神の居す所なり。毘沙門、すなわち上に出づ。持国天、乾闥婆衆 (Gandharva) の王とす。增長天、鳩槃荼 (Kumbhāṇḍa) の首領とす。広目、あるいは魯拏羅 (Rudra) の一名とす。あるいは薬叉 (Yakṣa)・羅刹 (Rākṣasa)・龍王 (Nāgarāja) なり。もしは湿縛 (Śiva) の眷属中に、またその名あり。並びに外道の談ずる所なり。その神位を卑くせんが為に、忉利天の下に置かる。

⑧ 帝釈天

『華嚴經』の説処、すなわち欲界中の三天にあり。その忉利天とは、すなわち帝釈 (Indra) の住する所なり。蓋し印度古代の民、漸く遊牧の俗を変え、農耕に従事す。その恐る所、最も旱魃にあり。これに因りて、深く帝釈を崇む。帝釈とは、すなわち天界の王にして、雷雨の神なり。常に六牙の白象に騎り、農民の献ぐ所の蘇摩 (soma) の杯を挙げ、手に金剛杵を把り、往きて阿修羅と戦う。その執持する所の兩宝蔵を破して、膏雨を地上に降し、田野滋潤し、枯禾再緑す。農民、歡喜して、頌を献ぐ。

⑨ 夜摩天

その生活に安きを得るに及ばば、すなわち死後、好処に往生せんと願いて、夜摩天に帰依す。夜摩とは、能く人間の靈魂をして、その天に住して、上妙の果報を受けしむ。故に、梨俱吠陀 (R̥gveda)、盛りに、この二天を頌う。後に補羅拏 (Purāṇa) に至りて、その説、漸く變じ、すなわち夜摩を以て人間の司命の神とす。是に於て怖畏の念、すなわち加う。呼びて伽羅 (Kālā) と曰ふ、また閻魔 (Yama) また Suyāma) と曰ふ。閻摩とは、終息制止の義なり。

註

- (1) 拙著「大村西崖著『密教發達志』 訳注研究（一）」（『大正大学研究紀要』 98、大正大学、2013）、「大村西崖著『密教發達志』 訳注研究（二）」（『大正大学研究紀要』 99、大正大学、2014）、「鉄塔相承説をめぐって——大村西崖著『密教發達志』 訳注研究（三）——」（小澤憲珠先生頌寿記念論文集『大乘仏教と浄土教』（仮題）、小澤憲珠先生頌寿記念論文集刊行委員会、2015）
- (2) 『法苑珠林』（T. vol.53, pp.744c～746c）
- (3) 『高僧伝』（T. vol.50, pp.383b～387a）
- (4) 『晋書』（『晋書』 vol.3, 古典研究会, 1971, pp.1209a～1212b）
- (5) 『高僧伝』（T. vol.50, p.389a）
- (6) 『法苑珠林』（T. vol.53, p.744a～c）
- (7) 『高僧伝』（T. vol.50, p.388a～c）
- (8) 『法苑珠林』（T. vol.53, p.859c）
- (9) 『大唐西域求法高僧伝』（T. vol.51, pp.6c～7a）
- (10) 『出三藏記集』（T. vol.55, pp.98c～99a）
- (11) 『歷代三宝記』（T. vol.49, p.69a）
- (12) 『高僧伝』（T. vol.50, pp.327c～328a）
- (13) 『開元釈教録』（T. vol.55, p.503a～b）
- (14) 『貞元新定釈教目録』（T. vol.55, p.800a～b）
- (15) 『孔雀王呪経』（T. vol.19, No.984）
- (16) 同右（T. vol.19, pp.458c～459a）に「結呪界法、帛戸梨蜜前出」として出づる

- (17)『善見律毘婆沙』(T. vol.24, p.793a)「結界に五種あり。一に方、二に円、三に鼓形、四には半月形、五には三角なり。」
 (18)『孔雀王呪經』(T. vol.19, p.459a)
 (19)『摩登伽經』(T. vol.21, No.1300)
 (20)『仏祖歷代通載』(T. vol.49, No.2036)
 (21)同右 (T. vol.49, pp.593c ~ 594a)
 (22)『仏說安宅神呪經』(T. vol.21, No.1394)
 (23)『仏說安宅陀羅尼呪經』(T. vol.19, No.1029)
 (24)『安宅陀羅尼呪經』の名は『出三藏記集』、『開元錄』、『貞元錄』のいずれにも見あたらない。しかし、『出三藏記集』には「七仏安宅神呪」(T. vol.55, p.31c)の名が見られ、『開元錄』(T. vol.55, p.484a, 635b)や『貞元錄』(T. vol.55, p.781a, 969c)には後漢の失訳として「七仏安宅神呪經」の名が見られる。大村は、この「七仏安宅神呪經」が現存している『安宅陀羅尼呪經』であると考えたのであろう。
- (25)『仏說辟除賊害呪經』(T. vol.21, No.1406)
 (26)『辟除賊害呪經』の名は、『出三藏記集』で「呪賊一卷(或いは辟除賊害呪と云ふ)」(T. vol.55, p.31c)とあり、呪賊の別名として出ている。『開元錄』では、「呪賊經一卷(一に辟除賊害呪と名く)」(T. vol.55, p.480b)とするが、さらに「呪賊呪法經」の名を出して「祐、直に呪賊と云ふ」(484a)とし、さらに安世高訳として「呪賊經一卷(一に除辟賊害呪と云ふ)」(633a)を挙げ、『出三藏記集』に挙げる呪賊經とは別本であるとするが、その上に後漢の失訳として「呪賊呪法一卷(異本)」(635b)を挙げる。つまり、呪賊經で別名が辟除賊害呪といわれるものに二本あり、一本が安世高訳、一本が後漢の失訳であったのであろうか。
- (27)『開元釈教錄』(T. vol.55, pp.483c ~ 484a)
 (28)『貞元新定釈教目錄』(T. vol.55, pp.780c ~ 781a)

(29)『出三藏記集』では、「新集続撰失訳雜經錄第一」の中に、翻訳年代は解らないが、現存しているものとして、これらの経名を挙げてゐる (T. vol.55, p.21b ~ c, p.32a)。

『歷代三寶記』 (T. vol.49, p.55c)

『仏説安宅神呪經』 (T. vol.21, p.911c)

『仏説辟除賊害呪經』 (T. vol.21, p.922a)

『仏説陀隣尼鉢經』 (T. vol.21, No.1352)

『仏説玄師殿陀所說神呪經』 (T. vol.21, No.1378)

『仏説檀特羅麻油述經』 (T. vol.21, No.1391)

『仏説摩尼羅賣經』 (T. vol.21, No.1393)

『仏説呪時氣病經』 (T. vol.21, No.1326)

『仏説呪齒經』 (T. vol.21, No.1327)

『仏説呪目經』 (T. vol.21, No.1328)

『仏説呪小兒經』 (T. vol.21, No.1329)

『開元釈教錄』 (T. vol.55, pp.503b ~ 504b) '呪目經が挙げられていない'

『貞元新定釈教目錄』 (T. vol.55, pp.800c ~ 801b) '呪目經が挙げられていない'

『歷代三寶記』 (T. vol.49, p.69b ~ 70b) '呪目經が挙げられていない'

支謙訳『仏説持句神呪經』 (T. vol.21, No.1351)

『仏説玄師殿陀所說神呪經』 (T. vol.21, p.901c)

『仏説檀特羅麻油述經』 (T. vol.21, p.908a) 趣意

『仏説摩尼羅賣經』 (T. vol.21, pp.910b ~ 911a) では、呪を持つ功德ではなく、「摩尼羅賣經」を念じたり、讃

じたり、読んだりする功德を説いている

(48) 『仏説呪時氣病經』(T. vol.21, p.491a)

(49) 『開元釈教錄』(T. vol.55, pp.504b ~ 505b)

(50) 『貞元新定釈教目錄』(T. vol.55, pp.801c ~ 802b)では、僧伽提婆の訳として『中阿含經』など五部一百十八卷を挙げるが、その中に「これら二經の名はなく、五經の名の直前に挙げている(801b)ので、僧伽提婆の訳出と考えられていない。

(51) 『歷代三寶記』では、僧伽提婆の訳出として『貞元錄』と同様に五部の經名を挙げているが、その中に、これら二經の名はなく(T. vol.49, p.70c)「曇無蘭の訳出として、『龍王結誦五龍神呪經』と『大神將軍呪經』の名がある(70a)。

(52) 『高僧伝』(T. vol.50, pp.390b ~ 392b)

(53) 『法苑珠林』(T. vol.53, pp.746c ~ 748b)

(54) 『出三藏記集』(T. vol.55, pp.103b ~ 104a)

(55) 『高僧伝』(T. vol.50, pp.334b ~ 335c)

(56) 『歷代三寶記』(T. vol.49, p.71a ~ b)

(57) 『開元釈教錄』(T. vol.55, pp.505b ~ 506c)

(58) 『貞元新定釈教目錄』(T. vol.55, pp.802b ~ 803c)

(59) 『仏説出生無量門持經』(T. vol.19, No.1012)

(60) 支謙訳『仏説無量門微密持經』(T. vol.19, No.1011)

(61) 『仏説出生無量門持經』(T. vol.19, p.684a)「波羅婆伽闍陀睺叉」の八字と、その字義を説いている。

(62) 『仏説觀仏三昧海經』(T. vol.15, No.643)

- (63) 同右 (T. vol.15, p.689a)
- (64) 同右 (T. vol.15, p.690c)
- (65) 同右 (T. vol.15, pp.690c ~ 691b)
- (66) 同右 (T. vol.15, p.693a ~ c)
- (67) 支婁迦識訳『仏説般舟三昧経』(T. vol.13, No.417)‘支婁迦識訳『般舟三昧経』(T. vol.13, No.418) なら
『仏説観仏三昧海経』(T. vol.15, p.653c)
- (68) 同右 (T. vol.15, p.679a)‘大正藏では卷七’
- (69) 『大方広仏華嚴経』(T. vol.9, No.278)
- (70) 『出三藏記集』(T. vol.55, p.61a)
- (71) 『大方広仏華嚴経』(T. vol.10, No.279)
- (72) 『長阿含経』(T. vol.1, pp.135c ~ 136a)
- (73) 『起世因本経』(T. vol.1, p.403b)
- (74) 『三界差別』と題する經典は見あたらない。あるいは『分別善惡報応経』(T. vol.1, pp.900c ~ 901a)を指すか？
- (75) 『阿毘達磨俱舍論』(T. vol.29, p.41a)
- (76) 『阿毘曇心論』(T. vol.28, p.826b)
- (77) 『阿毘達磨大毘婆沙論』(T. vol.27, p.424c, p.518a, p.691c, p.766a)
- (78)